

「ゴミ箱に咲いたアサガオ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

植物の生命力はすばらしい。たとえばクワ(桑)の木は、どんなに強く剪定して、根元しか残っていても、すさまじい勢いで復活する。何千年も前の種子が芽を出して育つこともある。先日、理科室でも、植物の生命力を実感するできごとがあった。



休み時間の理科室(実験観察室)で、6年生の子どもたちがゴミ箱(護美箱)の周りに集まって、「あーだこーだ」言っている。私も「何だ何だ」と駆けつけると、「先生、ゴミ箱の中見てよ、ほら!」という。どうせ「燃えるゴミ」の箱の中に、「燃えないゴミ」でも入っているのだろう・・・と思ったら・・・



何と、ゴミ箱の中でアサガオが咲いている!これは週末前に、5年生がアサガオの観察をした残り(ツル)を捨てて、放置していたものだ。花(花弁)はすべて観察に使い切っていたが、つぼみは若干残っていたようだ。数日後、それが開花したのだ。



中を見ると、湿ったティッシュがいくつも入っている。その水分で、アサガオは数日間生き延び、花まで咲かせたのである。私は上林 暁(かんばやしあかつき)の短編小説「花の精」の、枯れかけたツキミソウが生気を吹き返す場面の一節を思い出した。



私は霧吹きで水をかけてやった。アサガオはまるで朝の花壇に咲いているように生気を吹き返した。つぼみの状態から栄養源を絶たれたので、サイズは小さい。しかし、「花として」立派に役割を果たしている。



もっと驚いたのは、実も成長していたことだ。数日前に観察した時には、すべて採り去っていた。アサガオはゴミ箱の中でも、子孫を残そうとしていたのだ。